

人類は本当に「文明化」されたのか？

——「戦争は犯罪である」を世界の規範に——

マハティール・ビン・モハマド

はじめに、このシンポジウムの主催者の皆様に感謝申し上げます。こちらにお招きいただき、皆様に平和と戦争に関する私の見解を述べさせていただく機会を頂戴しましたことを、私は大変光栄に思っております。マラヤ大学の文明間対話センターと東洋哲学研究所が、このような重要なシンポジウムを開催されたことを、心から祝福するものです。

このシンポジウムのテーマ（「文明間対話——平和・共生・持続可能性」）を拝見した時、私は、すぐさま参加の

ご返事をいたしました。私は「平和」と「戦争の根絶」について強い関心があります。「戦争の犯罪化」すなわち「戦争は犯罪である」と規定するために様々な努力を重ねてきたからです。

「百万人殺せば英雄」の矛盾

現代の文明には、まことに奇妙なことがあります。もし一人の人間を殺せば、逮捕されて、有罪となれば絞首刑になるでしょう。その一方で、百万人を殺せば、



マハティール元首相はマラヤ大学出身。首相時代（1981～2003年）、「ルック・イースト・ポリシー（東方政策）」等を掲げ、マレーシアの経済発展の礎を築いた。東洋哲学研究所創立者と2回（1988年・2000年）会見している

それは犯罪とは見なされないのです。この考え方は異様です。あなたが一人を殺せば死刑となる。それなのに百万人を殺せば英雄と見なされ、勲章を与えられ、永遠に顕彰されるのです。これは道理に合わない話です。

人類史をかえりみれば、いつも人間同士で争ってきました。相手を支配するため、あるいは他人や他の集団の持ちものを奪うために、戦い合ったのです。これは過去、人間が文明化される以前の話です。

猿の世界を見てみましょう。そこには必ず、群れを支配する雄がいます。どのグループにもそれを支配している雄がいて、他の雄は彼に服従しないかぎり、仲間にはなれません。しかし時とともに、ボス猿も、人間と同じように、年をとります。すると若い猿がやってきて、古い衰えたボス猿を攻撃し、殺してしまうか、群れから追い出してしまいます。そして今度は、自分が新たなボス猿になるのです。

似たような行動は、人間世界にもあると思います。人間も他者への支配欲をもっているようで、小さな集

団内部での支配から始まって、複数のグループや集団がある場合は、他の集団を支配しようとするものが現れます。支配するために彼らは争い、しばしば殺し合います。そうしておいて、この殺人を「正当化」し「美化」しようとするのです。長い時間をかけて、人類は次第に文明化してきたのですから、戦い合うことをやめるべきだったのです。殺すことは犯罪だからです。しかし人間は争いをやめませんでした。

「文明化」とともに「大量死」の時代に

歴史を見つめ考察してみれば明らかなのですが、人間は文明化して知的になればなるほど、殺人のためにより強力な武器を開発してきました。

かつて、弓や矢、槍などを使っていたころは、それほど多くの人を殺すことはできませんでした。しかし時代とともに、人間はより強力な武器を開発しました。火薬の知識が中国から西洋へ渡った時、ヨーロッパ諸国は互いに紛争していました。そのため、火薬を知るやいなや彼らが真っ先に考えたのは、この火

薬を使って、どうやって、より遠くから、より多くの人間を殺すかということでした。そこで、ヨーロッパ人は銃砲を開発し、武器をますます強力なものにしたわけです。銃弾や砲弾で遠くから標的を撃てるようになり、さらに弾に火薬を詰めることによって、着弾すると炸裂し、より多くの人を殺すようになりました。今日では、たった一つの爆弾で何十万人も殺す方法を見つけてしまったのです。これが日本にもたらされた出来事でした。原子爆弾は、巨大な爆発によって、一瞬にして街全体を消滅させることができます。その威力を、彼らは戦時の日本で実験しました。原爆を広島と長崎に投下し、何十万人々々を殺したのです。これほどの大量虐殺が行われたにもかかわらず、より優れた殺人兵器を求めて、研究は続けられました。現代の核兵器は、より大量の人間を殺す力をもっています。そして、ロシアやアメリカのような国が保有している核弾頭の数には莫大です。それぞれが約一万个の核弾頭を持っているのです。彼らがもし核戦争を起こせば、世界は壊滅します。

私が思うに、人類は来るところまで来てしまったのです。我々の文明が跡形もなく一掃されてしまうかもしれないのです。人間は「我らは文明化された」と言い張っていますが、本当は、これが現在の人類の実態なのです。

過去を振り返ってみますと、文明の初期においては、殺人を罰していなかったことがわかります。その後、人々は、他者の苦しみを思いやることを学び、殺人は犯罪であり、しかも重大な犯罪であると見なすようになったのです。そして殺人者を死刑にする法律をつくりました。では、人間が文明化され、殺人が犯罪だと見なされるようになると、人々は戦争に行かなくなつたでしょうか。いいえ、それでも人々は戦争をやめなかったのです。こうした事実をかえりみたとき、はたして私たちは「我らは文明化された」と主張できるのでしょうか？ 私は疑問に思います。人類は今なお、「もつともつと多くの人を殺せる兵器」を求めて、その開発に従事しているのですから。

「勝者が敗者を裁く」不公正

歴史を見ると、部族と部族の間で激しい戦闘がありました。例えば、イスラーム以前、アラビア人は、各部族に分かれて対立し合っていました。彼らが戦つたのは、単に「違う部族に属していたから」です。その対立は世代から世代へと受け継がれ、終わることはありませんでした。もし彼らに、「なぜ、あなた方は戦い、殺し合うのですか？」と聞けば、「やつらは敵だからだ」と答えが返ってきたことでしょう。戦いを始めた理由など忘れてしまった後でも、殺し続けたのです。これと比べて、現代人が向上したわけではありません。いまだに世界の国と国の間で対立が起きています。今は敵でなくても、敵になる可能性がある」と思うだけで、その相手と戦う準備を彼らはするのです。

二度の世界大戦の死者は、一説では七千万人といえます。七千万人の人々が、「すべての戦争を終わらせるための戦争」という美名のもとに殺されたのです。それにもかかわらず、世界では今なお、戦争が続き、戦

争の準備も続いています。人類は、戦争という「国家間の問題を解決するための極めて原始的なやり方」を、いまだに放棄していないのです。だからこそ私は「人類はまだ文明化されていない」と思うのです。一人を殺すことを犯罪だと見なしながら、何万人・何百万人を殺す戦争を犯罪だと考えていないのですから。

戦争を犯罪だと見なす人たちもいます。しかし、彼らは「戦争の敗者は犯罪者だが、勝者は犯罪者ではない」と考えているのではないでしょうか。負けた側の人たちは裁判にかけられ、「戦争犯罪者」として死刑を宣告された人もたくさんいます。しかし、彼らを裁こうとした側も、殺人という点では有罪だったのです。要するに、彼らが敗者以上に多くの人を殺している、勝者であるために、彼らの殺人は罪とされなかったのです。これは、とんでもなく不公平です。ご承知のとおり、法廷では裁判官は公正でなければなりません。どちらの肩をもつてもいけないのです。しかし戦争においては、勝者が裁判を準備して、敗者を裁くのです。どう見ても、我々はまだ文明化してはいません。「犯罪

は、それに関与していない中立の立場の人間によって裁かれねばならない」ということを理解できていないのですから。

戦争による殺し合いで問題を解決してはならないとしたら、では、どうやって対立を解決すればよいのでしょうか？

マレーシアによる平和的解決の実例

マレーシアは、5つの国と国境を接しています。そして、そのすべての国が領土をめぐる、自国の領有権を主張してきました。

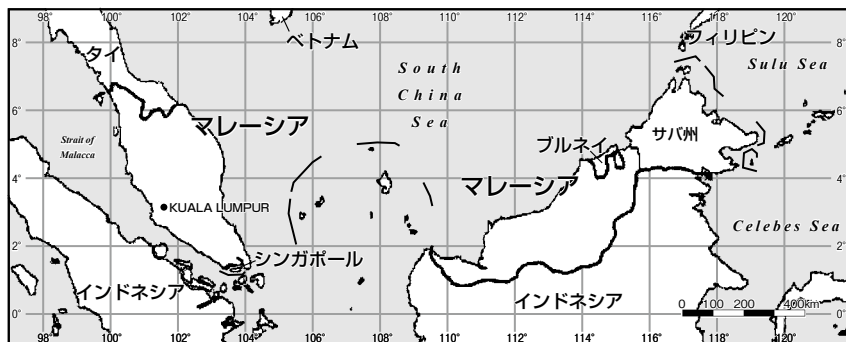
その一つは、タイとの領海問題です。マレーシアの北東側に、マレーシアとタイの両方が領有権を主張している海域があり、そこから天然資源が採れると信じられたため、この小さな海域をめぐる二国は対立してきました。幸い、私の前のマレーシア首相は、この問題を平和的に解決することを決め、タイ政府との交渉を始めました。最終的に、両国の首相は、この領域から採れた資源を平等に折半することに合意しました。

その後、共同開発海域が設定され、そこから採れた天然ガスを、現在、両国で半分ずつ分け合っています。このようにして私たちは、ただ一人の犠牲も出すことなく、この海域の資源の利益を享受しているのです。もしも戦争に訴えたりしていたなら、天然資源を採掘することはできなかったでしょう。そして戦争に勝ったとしても負けたとしても、それで問題が解決するわけではないのです。マレーシアが勝ったとしても、タイは後に勢力を増強して、その海域をすぐ奪い返そうとするでしょう。私たちが負けたとしても、同様に、タイからその地域を奪うことを考えるでしょう。しかしながら、平和的解決をするとうち意したおかげで、今日、この領域からガスを採取でき、その利益を分け合うことができるのです。

マレーシアは、インドネシアとも問題がありました。サバ州（ボルネオ島北部）の近くの小さな二つの島（シバダン島・リギタン島）について、インドネシアもマレーシアも領有権を主張し、長年にわたって協議を続けましたが、決着しませんでした。そして最終的には、国

際司法裁判所に解決をゆだねることで合意し、その結果、二島はマレーシアの領土という決定が下されたのです。インドネシアも裁判所の判決を受け入れ、問題は解決しました。我々は戦争に訴えることはしなかったのです。

マレーシアは南の隣国、シンガポールとも領土問題を抱えていました。小さな岩状の島（バトゥプテ島。シンガポール名はペドラ・ブランカ島）があり、船が岩に衝突しないよう、イギリスはシンガポールを統治していた時に、そこに灯台を建てました。当時、イギリスはマレーシアとシンガポールのいくつかの場所に灯台を設置しました。そのころ、マレーシアとシンガポールは、まだ一つの国とされており、ともにイギリスの行政下にあったのです。そのため、イギリスは便宜上、灯台群をシンガポールに管理させました。両者が独立した後、マレーシアはシンガポールに灯台の所有権は認めただのですが、島そのものはマレーシアの領土であると主張しました。我々は何度も交渉を続けましたが、話し合いでは解決できず、結局、国際司法裁判所にゆだ



ねることに決めました。そして裁判所は、島の領有権はシンガポールにあると判決を下したのです。マレーシアにとっては残念なことでしたが、戦争は起こしませんでした。もしも戦争に訴えていたならば、数百あるいは数千もの人命が奪われることになったかもしれません。

マレーシアとブルネイの間にも問題がありました。

ある海域を、両国とも自国の領海であると主張していたのです。交渉の結果、ようやく合意に至りました。「マレーシアは、その海域のブルネイの領有権を認める。一方、ブルネイはマレーシアのペトロナス（国営の石油・ガス企業）が、この海域で石油を採取することを認める」ということが決まったのです。

マレーシアはまた、フィリピンとも領土問題があり、フィリピンはサバ州全体の領有権を主張していました。サバ州は、かつてスルー王国（1457頃～1917年）に属していたのですが、同王国がサバ州を売却し、その後、最終的にマレーシアの一部になっていました。しかし、フィリピンが、サバ州は自分たちの領土だと主張したことで、二国間には緊張が存在していたのです。結局、両国は、あたかも二国関係が正常であるかのように、互いに大使館を設置したのですが、フィリピンは主張を曲げず、マレーシアもサバ州の領有権について譲歩はしませんでした。それにもかかわらず、私たちはどちらも、戦争に訴えることはなかったのです。

私が思うに、これこそが国家間の相反する主張や対立の問題を解決する方法です。日本と中国も、両国間の島々についての論争を、平和的に解決されんことを、私は切に願っております。

紛争で得るものは失うものより少ない

ここに国同士の複雑な問題を解決する方法があるわけです。できることならば、双方にとってプラスの結果になる、つまりウインウインの解決が望ましいわけですが、何かを得る時もあれば失う時もあるということとを、私たちは受け入れなければなりません。

何と言っても、一番素晴らしいことは、戦争で若者を犠牲にせずにすむということです。もし若者を失ってしまえば、結局のところ、両国にとって何にもならないからです。おそらく、戦争に必要な金額は、係争地から採取できる石油・ガスその他の資源の総額を上回るでしょう。アメリカがベトナム戦争で使った費用は、第二次大戦での軍費よりも多かったのです。仮に係争地から天然資源が採れたとしても、そこから得ら

れる利益よりも、戦費と多数の死者と戦災を考えれば、損害のほうが何倍も大きいのです。それにもかかわらず、いまだに戦争を選択肢のひとつと見なしている人々もいます。この点にこそ、私が「人類は十分に文明化されてはいない」と考えるゆえんがあります。

戦争とは、人を殺すことです。おびただしい数の人々を殺してしまうことなのです。今日では、この戦争というものは遠い存在になっています。しかし私は自身で戦争を経験しています。第二次世界大戦が太平洋で始まったとき、私が目撃したのは、筆舌につくせない残酷な光景でした。私は思い悩みました。もし自分も戦争で殺されたならば、どれほど恐ろしいことだろうかと。

自らの利益のために人を殺すなどということは、あまりにも原始的であり利己的です。人類が「我々は文明人である」と言いたいのであれば、末永く平和に共存して生きたいと願うのであれば、戦争というもの撤廃すべきです。戦争を犯罪と見なすべきなのです。

現代の科学技術は、費用が安上がりのUAV(UA

named Aerial Vehicle) という無人航空機を造り出しました。

オペレーターは、戦闘地域から三千マイルも離れた部屋から標的を見ることができ、このUAVを操作して、人を撃ち殺したり、街を爆撃して無人の廃虚に変えてしまうのです。「自分が殺されず、自分の国が勝つのであれば、それは『良い戦争 (Good war)』だ。ほかの誰かが死のうと知ったことではない」。こんなふうに人々が考えているのではないかと、私は心配しています。それでは私たちは、真の文明人とは言えません。そう私は信じます。

「戦争が根絶された世界」へ

私は、戦争をなくすための運動が前進を続けていくことを願っています。このシンポジウムに参加したのも、これが「平和・共生・持続可能性」についてのものだからです。いつの日か、さまざまな国の異なる人種の人々が皆、平和に共生できるようになる。私はそう信じております。その日が来れば、私たちは、もつとずっと平和な「戦争なき世界」で、人生を最大限

に満喫して生きることができるのです。

マラヤ大学に「文明間対話センター」が設立された理由もここにあると信じます。東洋哲学研究所もまた平和のために尽くしておられます。両者の協力によって、「戦争が禁止され、人々がより素晴らしき人生を生きられる時代」に向かって一歩前進できると、私は信じています。

しかしながら、それは長い苦難の道のりです。何十年あるいは何世紀もかかるかもしれません。それでも、決して忘れないでください。かつては奴隷制度が世界のいたるところで認められていたことを。しかし、人々が奴隷を所有しているなか、誰かが考えたのです。「奴隷の所有は、人間のすることではない」と。そして、そう信じる人たちが、奴隷制の撤廃に向かって戦っていったのです。何十年、何百年もの闘争。その果てに、とうとう奴隷制度は廃止されました。

このように、奴隷制度廃止には長い時間がかかりました。戦争の廃止もまた、私が生きている間には、いえ、皆さんが生きておられる間にも実現されないかもしれ

ません。

しかし、私は信じます。「その日は必ず来る」と。そのとき、ようやく私たちは高らかに言えるのです。「人類は、ついに文明化された」と。

(Mahathir bin Mohamad / マレーシア第4代首相)